

まるやま ちい ゆうし
丸山の小さな勇士

お母さんの石刀がわれちゃった！
新しい材料をさがしに南の海岸をめざすマルとサンサン。
でも、どうやって行くのかな？

勇士たちといっしょに海へぼうけんに出たお父さんが
二人にすてきなものをもって帰ってくれたよ。
さて、それは何だったのかな？

まるやま
丸山の
ちい
小さな
ゆうし
勇士



作・吳立萍 蘭陽博物館
絵・羅鈺樺



作・吳立萍 蘭陽博物館 絵・羅鈺樺





指導団体 / 文化部、宜蘭县政府文化局

出版者 / 宜蘭県立蘭陽博物館

発行人 / 陳碧琳

文 / 吳立萍、蘭陽博物館

絵 / 羅鈺樺

日本語翻訳 / 游貞華、高郁雅

日本語校正顧問 / 阿部真理子

日本語編集 / 洪崢嶺

日本語事務手配 / 社団法人台北市バーリアフリー推進協会

電話 / (03)977-9700

ウェブサイト / <http://www.lym.gov.tw>

館所在地 / 宜蘭縣頭城鎮青雲路三段750號

出版日期 / 2020年10月第1版

ISBN: 9789865418335

GPN: 4710901309

※発行機関が本書のすべての権利を有します。本書の利用又は内容の使用に当っては、発行機関の同意、或いは書面での授權書が必要となります。

まるやま ちい ゆうし 丸山の小さな勇士



作・吳立萍・蘭陽博物館 絵・羅鈺樺

ごあいさつ

先史時代の暮らしの知恵から 困難に立ち向かっていく勇気を学ぼう

出土した遺物の研究調査から、宜蘭の先住民たちは、文明の利器が存在しない数千年前において、幾多の困難を乗り越え海を渡り、他の部族と交易をし、先史時代の農耕、捕鯨及び漁業の生活を営んでいたことが分かっています。

このお話の舞台は、宜蘭県冬山郷に位置する、2018年11月に国定考古遺跡となった「丸山遺跡」です。ここでは人獣形玉器が台湾の遺跡では最多となる12点発見され、新石器時代の石器加工場と比喻されるように、当時の良質な石器、陶器、墓壇等が多く出土しています。

今回、蘭陽博物館は、『立志』と『自然保護』を主題とする本作に出土品の一部を盛り込み、子どもたちに主人公マルとサンサンの冒険を通して先史時代の宜蘭を想像し、人間と自然の共生の知恵や勇気を感じ取ってもらえるよう制作しました。

マルとサンサンのお話は、最後に幸せな結末を迎えます。大人の方が読んであげる際には、今の科学技術に頼らなくても二人のように知恵と勇気と愛で困難に立ち向えることを子どもたちに考えてもらうきっかけを与えていただけると幸いです。

蘭陽博物館 館長

張碧琳

登場人物

お父さん

お母さん

マル

サンサン

スピッツ犬





およそ^{さんぜんねんまえ}三千年前、^{らんようへいげん}蘭陽平原にマル、サンサン、
そしてかわいいスピッツ^{けん}犬がすんでいました。
^{とうざんがわけんりゅうく}冬山河源流区^{おか}の丘にある^{まえ}うちの前には、
^{おお}大きな海が^{うみ}広がっていました。



ふたり
二人のすむ集落では、大人たちは自分たちで作った
いし き どうぐ
石や木の道具をつかって、たはた
海や川で魚をとったり、山へ狩りに行ったり、
うみ かわ さかな
まいにち
毎日いそがしくはたらいしていました。





ある日、お父さんが漁に出ると言って、
たくさんの石器を出してきました。
石器はていねいに研がれていて、
魚をとるときにつかうもの、
ほかの部族との物々交換につかうものもありました。

おとこ
男たちはいろいろなしゅるいの石器^{せっき}をもって、海^{うみ}に出ました。
お父^{とう}さんは、「風^{かぜ}が強いから、早く^{つよ}帰^{はや}るんだよ。」
と^い言^ふって舟^{ふね}からきょうだい二人^{ふたり}に手^てをふりました。





マルとサンサンが^{しゅうらく}集落にもどると、
^{かあ}お母さんが^{せきとう}われた石刀をも^たって立っていました。

「ああ、こまったわ。
^{せきとう}石刀は^{みなみ}南の^{かいがん}海岸の^{いし}石でできてるの。
このへんでは^{おな}同じ^{ざいりょう}材料が^て手に入らないのよ、
どうしよう。」^{かあ}お母さんが^い言いました。

「ぼくたちでさがしに行こうよ、
^{かあ}お母さんにはないしょでね。」
マルとサンサンは、
^{ちい}小さな^{こえ}声でそうだんしました。





ふたり
二人がどうやって南の海岸へ行こうか
かんが
考えていたとき、ぐうぜん一頭のシカに出会いました。
かわ
「この川をずっと下って行ってごらん。
かいかん しゅごん
海岸で守護神のイルカに会ったら、
きつとたすけてもらえるよ。」シカは言いました。

はまべ
浜辺では、イルカがふたりをまっていた。
はや
「早くのって!南の海岸までつれて行ってあげるから。」



An illustration of two children and a dog on a rocky shore. The child on the left is a girl with dark hair and glasses, wearing a white top and skirt, holding a dark rock. The child on the right is a boy with a mustache, wearing a white loincloth and a basket, also holding a dark rock. A small spotted dog is between them. The background is a large brown rock wall with the ocean visible on the left.

かいがん 海岸のがけのまえにやってきました。

「この石かどうかわからないけど、ひろってみるか!」

ふたりが石を手にとったとき、とつぜん地面がグラグラ
ゆれました。

「わあ、地震だ!」

An illustration of a wild boar with dark, spiky fur and small tusks, lying down on a rocky, brownish ground. In the foreground, the silhouettes of two children are visible: a girl with a flower in her hair and a boy with a bag slung over his shoulder. The background is a textured, brownish landscape with scattered rocks.

「痛い！」そこには一頭のイノシシが横になっていました。
イノシシの足は上からおちてきた石におしつぶされています。

「たすけてあげようよ！でも、イノシシってすごく凶暴そう！」
マルとサンサンは、こわかったけど、勇気を出して
イノシシの足の上の石を取りました。

「ありがとう！今、きみたちがうごかした石が、
そのさがしていた石だよ。」イノシシが言いました。

「やった！でもこのままでは大きすぎるから小さくわってもって帰ろう。」
二人はおよろこび！

マルとサンサンは石をもって集落に帰ると、
すぐ長老たちに会いに行って、
お母さんのために石刀を作って
くれるようにお願いしました。





^{ふたり}二人はもって帰った^{かえ}新しい^{あた}石刀^{せきとう}を
^{かあ}お母さんにわたしました。

「よかったわ。これで^{あわ}粟^{しゅうかく}の収穫ができるわ。

^{いま}今、ちょうどみんなで^{とう}お父さんたちをでむかえる
^{ほうりょうほうさくさい}豊漁豊作祭^{じゅんぴ}の準備をしているところなのよ。」

^{かあ}お母さんはとてもうれしそう。



どう
お父さんが帰ってきました! たくさんの魚、
そしてきれいな玉石ぎよくせきのかざりをもって。



「きみたちのおかげで
お母さんは本当にたすかったよ!
父さんにとって二人は小さな勇士だ。

とてもいいものをあげるから
大事にするんだよ!」

お父さんは二人の耳にきれいな玉器を
つけてくれました。

マルとサンサンはうれしい気持ちで
みんなと一緒に
今年の大漁、
豊作をおいおいしました。



龜山島

太平洋



宜蘭での考古の発見！

考古学者の調査によると、約五千年前ごろには、
宜蘭に人類が居住していたことが分かっています。
約400年前までに人類の文化的発展は新石器時代と
金属器時代を経て、今現在65か所の遺跡が発見されています。
地図内で示されているのは主要な先史遺跡の一部です。

まるやまいせき だいかいぼう 丸山遺跡大解剖！

マルとサンサンの住む丸山の丘陵はどこにあるか、知っていますか？

それは、蘭陽平原の南側の、山と丘陵の境目にあります。

三千年前の丸山は海に近く、まわりを川が流れ、水が豊富で、今より温暖だったようです。

当時の丸山人は磨製石器の製作が得意で、新石器時代晩期に見られる精細な研磨技術を持っていました。石器は当時の重要な生活の道具でしたが、それ以外にも船で南方の今の花蓮、台東海岸まで運び、物々交換での交易もしていました。石器を玉器や他の物に交換して丸山に持ち帰っていたので、丸山遺跡でも玉器がいくつか出土しています。

ところで、どうやったらそんな昔のことが分かるのでしょうか。これらは根拠のない想像のお話ではなくて、考古学者が何度も発掘、考察、細やかな研究を重ね、じっくりと検証した後、推測した結果なのです。

考古学者の調査では、丸山人はそこでおよそ一千年生活していましたが、その後の行方はいまだに謎のままです。

陶紐（陶器製のつまみ）

犬形の陶器製人形のように見えますが、土器のつまみの部分です。その可愛さから、考古学者には「けけ狐」の愛称で親しまれています。

玉環

玉で作った腕飾りて、花蓮地方からのものと推定されています。

方形多孔石器

この石器は何に使っていたかまだ分かっていません。想像してみても楽しいですね。

捲簾型石刀（巻いた花弁型の石刀）

栗の刈り取りに使う石器です。曲がった形が手ににぎりやすくなっています。

人獣形玉器

二人で野獣を運んでいる形をしていて、主に耳飾りとして使いますが、さいしやうや副葬品の玉器の可能性も。丸山遺跡で出土したもののほとんどに欠けているところがあります。

矢じり形石器

狩猟に使われ、先がすどく研がれています。

兩端形網錐（両吊り型網錐）

両端を網の下に結んで、おもりに使います。